月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol. 98



ヨシュアの言葉に
エステルは……

**英雄伝説
空の軌跡SC
～絆の在り処～**

リィン&アリサの新衣装が登場！

『英雄伝説 暁の軌跡』

カルマ多き住人たちの
運命は!?

**も～っと集まれ！
ファルコム学園**

ファルコムニュース

『軌跡』シリーズ15周年！
特務支援課メンバーの
ゆる～い日常を描く

**英雄伝説 零の軌跡
午後の紅茶にお砂糖を**

新アクション＆
新キャラクターの
情報が到着！

イースⅨ -Monstrum NOX-



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS



序文

自分ではない何者かになる。
そんな夢を見たことがあるだろうか？
その夢の中で私は考える。
これは自分なのか、自分ではないのか。
夢が現実なのか、現実が夢なのか？
私が辿り着いた答えはひどく単純だ。
『どちらでもいいではないか』
どちらが真実なのか――ではない。
どちらも真実なのだ。

『バルドゥークの檻』本文より～

新システム《異能アクション》と 登場キャラクターの情報が到着！

『イースⅨ -Monstrum NOX-』

2019年発売予定の『イース』シリーズ最新作『イースⅨ -Monstrum NOX-』。今月は『イース』といえばやっぱりアクション！　ということで、その要となる新システム《異能アクション》の情報が到着！　さらには、登場キャラクターもついに明らかに！

タイトル：イースⅨ -Monstrum NOX-　**ジャンル**：アクションRPG
対応機種：PlayStation®4　**発売日**：2019年予定
プレイ人数：1人　**CERO レーティング**：審査予定

新システム《異能アクション》で バルドゥークを縦横無尽に駆け回れ！

《異能アクション》とは？

怪人たちが持つ超常的な力《異能》を発動させることができる、
今作独自のアクション要素。
街中、フィールド、ダンジョンを問わず、あらゆる場所で発動することができ、
敵とのバトルだけではなく、ダンジョンのギミック解除や探索でも大活躍するとのこと。
また《異能アクション》はバルドゥークに出現する
《怪人》の協力を得ることで、どんどんと増えていくようだ。

天空散歩（ヘヴンズラン）



垂直な壁面も軽々と駆け上がっていける異能。一部のダンジョン、探索エリアでは、この異能を使用することで新たなルートが開けることも。街中では、高所に上ることで思いがけない発見をすることも…？

猛禽の翼（ハンターグライド）



巨大な羽を広げることで、長時間の滑空を可能にする異能。高所からの滑空であればかなりの距離を移動することが可能で、使い方次第で行動範囲が一気に広がる。戦闘では、敵の攻撃を避けつつ、異能を活かして上空から奇襲を仕掛けるといったトリッキーな戦法も。

※画像は開発中のものです。

©2019 Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.



英雄伝説
閃の軌跡06

原作／日本ファルコム
脚本／恵村まお　漫画／さがら梨々
A5判　160P　定価：本体991円+税
ISBN 978-4-8021-3123-0
©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©SAGARA RIRI 2018

好評発売中!!

エレボニア帝国に吹き荒れる陰謀の嵐！
時代が選ぶのは果たして誰か!?
そして友という絆に背を向け、
両雄相まみえる！
激動のクライマックス！

発行：フィールドワイ　フィールドワイ公式HPはこちら➔www.field-y.co.jp
発売：メディアパル　ファルコムブックス公式HPはこちら➔www.field-y.co.jp/falcombooks

今作の登場人物たちは動物!?
気になる新キャラクターをチェック！



「ロムン帝国の圧政に苦しむ皆さん！これはボクからの贈り物だよっ!!」

白猫

攻撃スタイル：格闘

富裕層から金品を盗み、貧民街で暮らす貧しい人々に分け与える義賊として監獄都市バルドゥークで活動している怪人。住民たちとも頻繁にコミュニケーションを取っているらしく、身軽で派手なパフォーマンスを街中で披露することも。猫のようにしなやかな体躯を活かしたスピーディーな打撃攻撃を得意としている。



鷹

攻撃スタイル：双剣

“天誅”と称して街中で辻斬りを働く怪人。酒癖が悪いだけでなく、この上なく粗暴な戦闘狂で売られた喧嘩を買うどころか自ら騒ぎを起こすことも。バルドゥークに出現する怪人たちの中で最も協調性に欠け、他の怪人も彼の振る舞いには手を焼いているという。







「剣は人を斬るために在るし、力ってのは破壊のために有るモンだろ?」

★授業中に響き渡る謎サウンド！★







カルマとは



戦士の日課



ポイズン



自分用



呪われないオアシス



リーシャの毒



徳と業



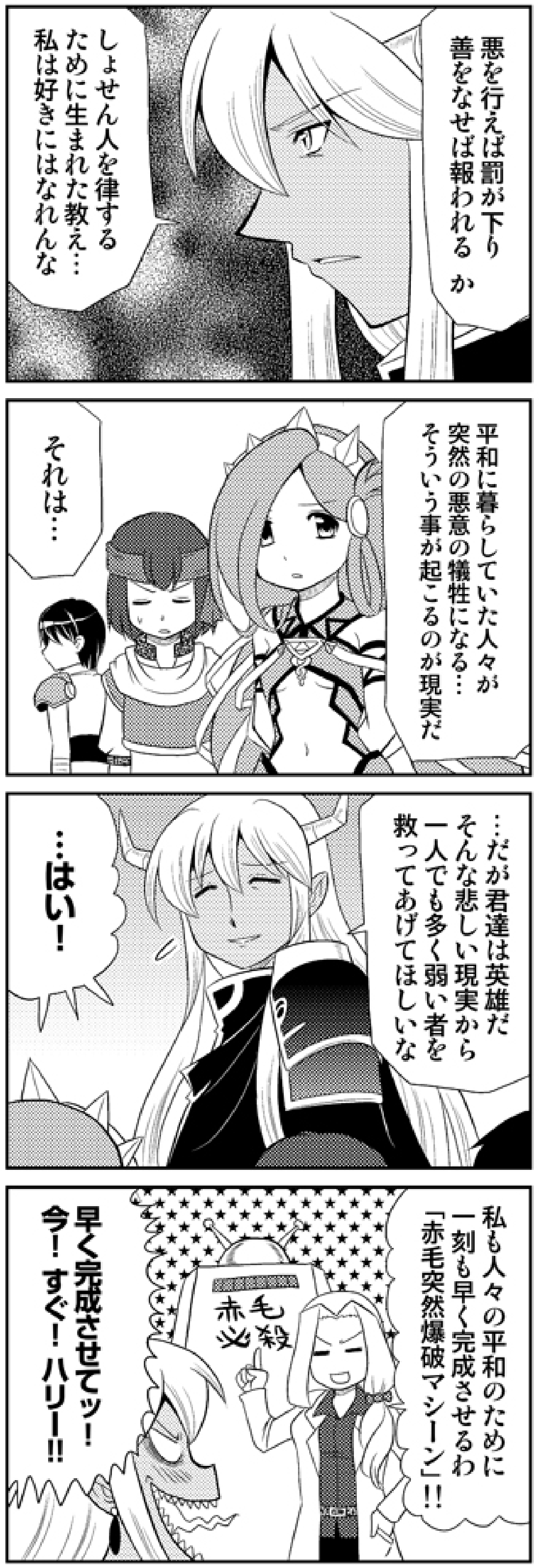
いいこと



からあげとレモン



突然の悪意



俺にできること



すぐそこにあった毒





発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら→ www.field-y.co.jp



発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら→ www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら→ www.field-y.co.jp/falcombooks


君が僕を探してくれていたのは知ってる
でも君は
僕にとって
足手まといになるだけだ
空の軌跡SC
～絆の在り処～
漫画 啄木鳥しんき
原作 日本ファルコム
ど…どうして
僕は結社を壊滅させるために綿密な計画を立ててきたんだ
君が結社にさらわれてこなければ
僕は予定通りグロリアスを爆破することができたのに


あ…
そっか…
それは…
ごめん…ね
だけど…
それに
え？
君と僕は
しょせん生きてきた世界が違うんだ
僕みたいな人間がいたら君のためにならないよ
殺すか殺されるか
奪うか奪われるか
僕は君と出会うまでそんなことばかり繰り返してきたんだから


で…
でも…
それだけじゃ…
ないのよね？
お父さんや
お母さんや
お姉さん…
それに
《剣帝》…
じゃなくて
レーヴェと
一緒にいて
幸せだった頃も
ちゃんと
あったんでしょう!?
…確かに
そんな記憶も
…あるよ
でもね

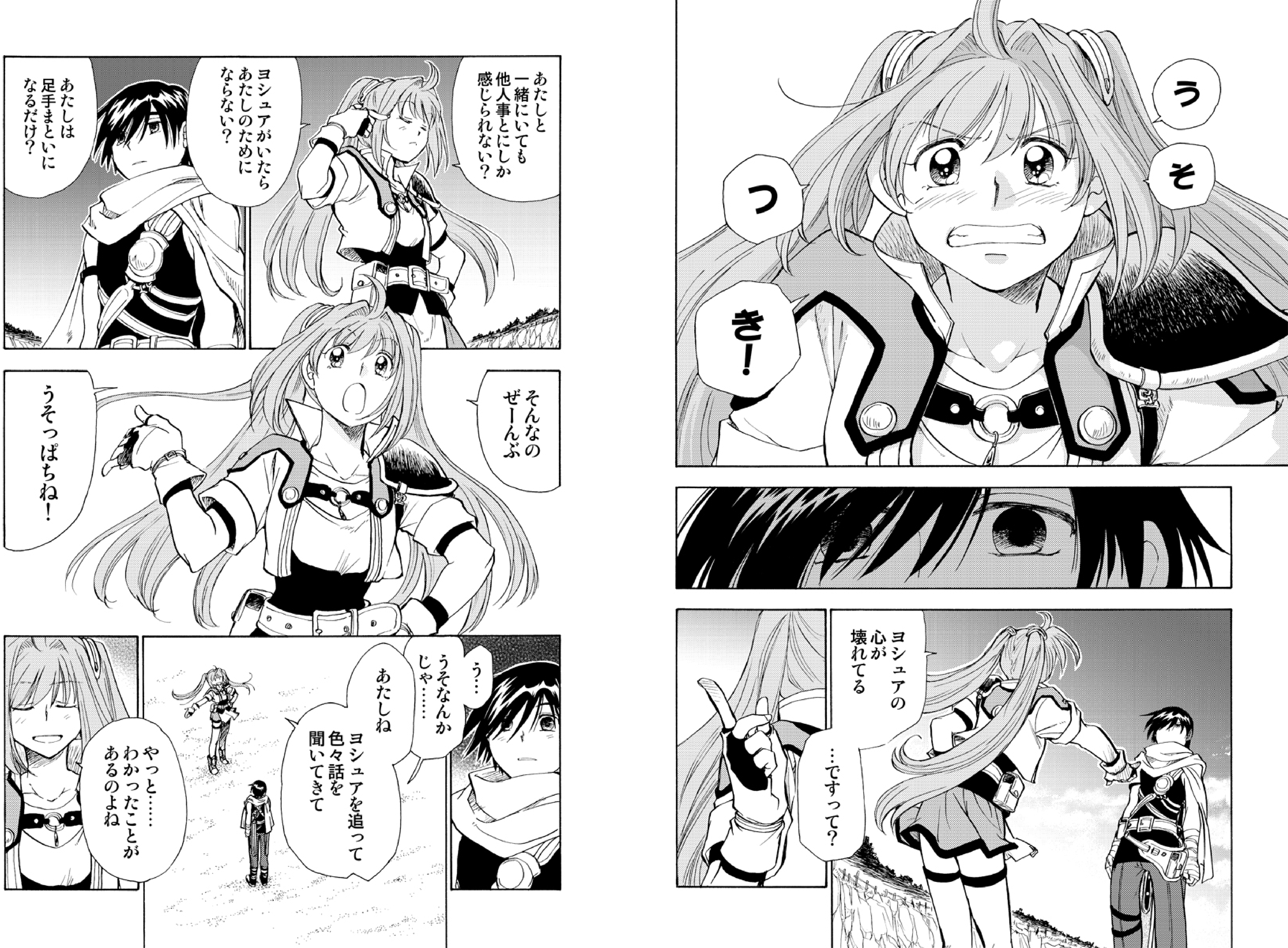

その記憶は
まるで
他人事
みたいなんだ
え
…ハーメルでの
思い出は
今でもはっきり
覚えているよ
穏やかで
幸せだった
日々のことも
両親が目の前で
殺されて
火の海になった
ハーメル村を
隣人の屍を
踏み越えながら
逃げ惑った
あの夜のことも


村の外へ逃げた姉さんと僕は待ち伏せしていた男に襲われた
僕をかばってくれた姉さんは男に軍刀で何度も何度も切りつけられて
血まみれになりながら死んでいった…
…ひどい話だろ？
でも
僕はあんまり哀しくはないんだ
たぶんそれは
僕が人であることを諦めて
ただの人形になったからだと思う

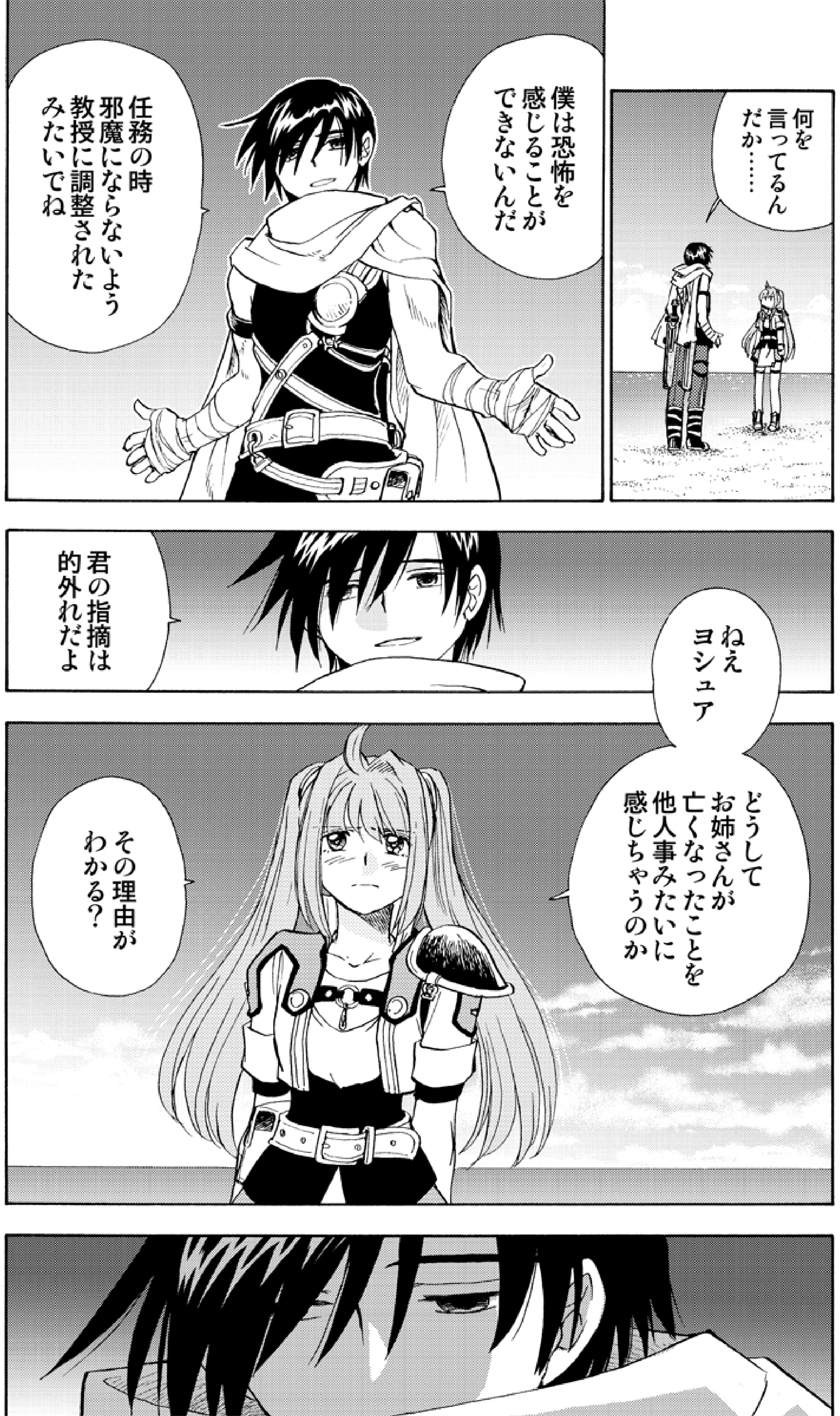

だから自分の過去を話してても
他人の日記を読んでいるような不思議な違和感しかないんだよ
それは
君と一緒にいる時も同じだった
え…
君に出会えて僕は変われたと思っていた
君と共にいられるのが嬉しかった
君のことが愛しくてたまらなかった


だけど
僕は
それさえも
どこか
他人事のように
感じていたんだ
たぶん…それが
本当の僕なんだよ
虚ろで
空っぽで
心が壊れた
できそこないの人形…
そんな
僕と
君は
一緒にいる
べきじゃない

だから
お別れだ
エステル
もう
僕のことは
追いかけないで
ほしい


う
そ
っ
き!
ヨシュアの心が壊れてる
…ですって?
あたしと一緒にいても他人事とにしか感じられない?
ヨシュアがいたらあたしのためにならない?
あたしは足手まといになるだけ?
そんなのぜーんぶ
うそっぱちね!
う……
うそなんかじゃ……
あたしね
ヨシュアを追って色々話を聞いてきて
やっと……わかったことがあるのよね


どうしてヨシュアがあたしの前から消えたのか
その本当の理由をね
それは僕が
いいから聞いて
たぶんヨシュア自身も気づいてなかったことなの
あのね
ヨシュアは
怖かっただけよ
自分のせいで
お姉さんたちが亡くなったと思い込んで…
同じことが私の身にも起きるかもしれないことに
耐えられなくて…
だからあの夜
ヨシュアはあたしの前から逃げ出したのよ
それ以外の理由は
全部後づけだわ！


何を言ってるんだか……
僕は恐怖を感じることができないんだ
任務の時邪魔にならないよう教授に調整されたみたいでね
君の指摘は的外れだよ
ねえヨシュア
どうしてお姉さんが亡くなったことを他人事みたいに感じちゃうのか
その理由がわかる?

それは…
僕が壊れてるから…
ううん
違う
ヨシュアはね
お姉さんが亡くなった時のショックを思い出したくないだけ
だから無意識のうちに
他人事みたいに思い込もうとしているのよ


でも……
さっきあたしを助けてくれたのも同じことよ
相当苦労してあの戦艦に忍び込んだんでしょ？
なのに…迷いもせずにあたしを逃がしてくれた
まるであたしを一刻も早く危険から遠ざけるように…
ヨシュアは壊れてなんかない


ただ…怖がりで
自分にうそをついているだけ
今のあたしには
自信を持って断言できるわ


怖がりで
勇敢なヨシュア
うそつきで
正直なヨシュア
あたしの大好きなヨシュア
やっと
あたしは
ヨシュアに届くことができた



ねえ
ヨシュア
約束しよう
お互いが
お互いを
守りながら
一緒に歩いて
いこうって!
あたしは
もう守られる
だけの存在じゃない
これでも…
ヨシュアの
背中を守れる
くらいには
強くなった
ヨシュアが
側にいて
くれたら
その力は
何倍にも
大きくなるわ!
大丈夫
結社が
何をしようと
あたしは
絶対に
死んだり
しないから


だから
もう
怖がる必要なんて
ないんだよ
エ…ス…
テル……


あ……
なん…で……
…涙なんて……


姉さんが死んでから…
演技でも…
流せたこと…
ないのに…
えへへ
そっか
見ないであげるから
そのまま泣いちゃうといいよ


こうしてあたしが
抱きしめててあげるから

次回に続く


FB ファルコムBOOKS
空の軌跡外伝
レーヴェ物語
作画：楽時たらひ 脚本：田沢大典
もうひとつの『空の軌跡』が始まる――
原作：日本ファルコム
（『英雄伝説 空の軌跡』）
価格：893円(税込)
ISBN:978-489610-224-6
『英雄伝説 空の軌跡』の人気キャラクター・《剣帝》レオンハルトの過去を描くアウターストーリーのコミカライズ。彼はいかにして《身喰らう蛇》に与みし、数奇な運命を辿ったのか。レオンハルトの目線から見たもうひとつの『空の軌跡』の物語が始まる！
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
全国書店にて大好評発売中!!
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら www.field-y.co.jp


英雄伝説
空の軌跡SC 3
ソラノキセキSC
～絆の在り処～
《剣帝》レオンハルトとともに現れた、古竜レグナートの暴走を抑えるために奮闘するエステルたち遊撃士一行。その頃、復讐者となったヨシュアはカプアー家の助力を受け、静かに結社《身喰らう蛇》へと迫りつつあった……。名作RPGのコミカライズ、迫真の第3巻！
昏き瞳の暗殺者
《漆黒の牙》復活
著者：啄木鳥しんき
原作：日本ファルコム
定価：本体800円+税
ISBN:978-4-8021-3124-7
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.
©KITSUTSUKI SHINKI ©2018 FIELD-Y
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら www.field-y.co.jp/falcombooks

▶ファルコムニュース◀
ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

2年半ぶり入魂の完全フルアレンジアルバム 『YsⅧ SUPER ULTIMATE』2019年5月10日先行発売決定!! 一般販売は5月31日より発売開始!



アクションRPG「イース」シリーズ最新作「イースⅧ -Lacrimosa of DANA-（ラクリモサ・オブ・ダーナ）」より、劇中使用曲の中から特に人気の高い楽曲を厳選し、全曲新アレンジ、新録音を行ったフルアレンジアルバム『YsⅧ SUPER ULTIMATE（イースエイト スーパーアルティメット）』の発売が決定!

公式通販サイト「ファルコムショップ」、「Amazon.co.jp」および各音楽配信サイトにて2019年5月10日（金）より先行販売、一般販売は5月31日（金）予定。

【参加アーティスト】
佐坂めぐみ（Vo）／末廣優里（Vo）／梶川ようこ（Vo）／ADD（SAX）／古谷光広（EWI）／徳永延生（HCA）／長野昭子（VN）／山岸孝教（VC）／井上央一（G）／寺前甲（G）／目純一郎（B）／榎本敦（B）／和田耕平（B）／シゲ山本（KEY）／堀川晃弘（KEY）他

【発売日】
《先行販売》2019年5月10日(金)／《一般販売》2019年5月31日(金)

【価格】
《CD盤》2,800円(税抜）《DL版》2,400円(税込)／単曲250円(税込)
《ハイレゾ版》3,000円(税込)／単曲350円(税込)
※DL版、ハイレゾ版は2019年5月10日(金)から配信開始となります

【収録曲】
1.SUNSHINE COASTLINE
2.Hope To You
3.LOST IN GREEN
4.流れ行く夜を超えて
5.GENS D'ARMES
6.Everlasting Transeunt ～永遠の旅人～
7.In Side My Head
8.Dana
9.Theos De Endrogram ～Trance Mix
10.Eternal Sunshine
11.永遠の旅人

■音楽配信サイト
iTunes®Store／Amazon デジタルミュージック／mora／music.jp
■ハイレゾ版音源配信サイト
「e-onkyo music」/「mora」
※ハイレゾ音源版は全曲96kHz／24bit(WAV&flac)となります。
※「iTunes® Store」では高音質・DRMフリーのiTunes Plusで世界111ヶ国、ファルコム楽曲4,944曲を配信。
■イースシリーズ関連サイト
《「イースⅧ -Lacrimosa of DANA-」公式サイト》https://www.falcom.co.jp/ys8_ps4/
《「イースシリーズ」ポータルサイト》 https://www.falcom.co.jp/ys_portal/

「軌跡シリーズ」のキャラになりきってVR体験ができる！ 『軌跡シリーズ15周年記念コラボカフェ in VREX』開催中!!

「軌跡シリーズ」生誕15周年を記念した、VRゲーム＆カフェバー「VREX」と「軌跡」シリーズとのコラボイベントが開催中です。「VREX」全店で楽しめる体感型VRゲームのアバターが「リィン」「アリサ」といった「軌跡」シリーズキャラ仕様に。さらに、店内では「軌跡」シリーズに登場した料理や、各キャラクターをイメージしたコラボフード・ドリンクも大人気！

VREX店内に設置された期間限定「ファルコムショップ」と「電撃屋"軌跡"メモリアルショップ」では、「軌跡」シリーズの限定グッズなどを販売。コラボフード・ドリンクご注文の方には、ICカードステッカーをプレゼント!（全9種＋シークレットあり）

■イベント名:軌跡シリーズ15周年記念コラボカフェ in VREX
■主催:株式会社フタバ図書
■協賛:日本ファルコム株式会社
■期間:2019/3/18～2019/4/21
■場所:VRゲーム&カフェバーVREX
【東京】渋谷宮益坂店、新宿店
【広島】広島八丁堀店
★「軌跡」キャラになりきって VRゲーム9種が楽しめる!
【3/18～】リィン／クロウ／アリサ／アルティナ
【4/8～】 エステル／ヨシュア／ロイド／キーア







VREX公式サイト：http://www.vrex.jp/

『閃の軌跡Ⅳ／軌跡シリーズ』 15周年記念の痛印、オリジナルグッズ、切り絵が発売!!

イラスト印鑑通販店「痛印堂」、グッズ通販サイト「キャラ印.com」、切り絵通販サイト「キリトリエ」で『閃の軌跡Ⅳ／軌跡シリーズ』の痛印、グッズ、切り絵が同時発売!

実用性はもちろん、コレクションやインテリアとしても最適な逸品数々をこの機会にゲットしよう!



痛印 痛印堂：http://www.itaindou.com/

『空の軌跡』『零/碧の軌跡』『閃の軌跡』より「エステル・ブライト」、「ロイド・バニングス」、「リィン・シュバルツァー」など軌跡シリーズのキャラクターのイラストを印鑑の印影に再現。印鑑ケース、捺印マットも同時に販売受付開始。
2019年5月31日（金）までの、期間限定受注販売となっています。

■『閃の軌跡Ⅳ／軌跡シリーズ』販売特設ページ
http://www.itaindou.com/sa_107sennokiseki

【痛印堂のハンコは銀行印としても使用可能】
『閃の軌跡Ⅳ』痛印は、ご要望に合わせて製造を行うオーダーメイド方式になります。好きな絵柄の中から、彫刻文字や書体を選べるので、自分だけの痛印をご提供いたします。さらに『閃の軌跡Ⅳ』痛印は、実名入りなら銀行印としても使える実用的な印鑑になります。
※登録を保証するものではございません。口座開設や実印登録にご利用される予定がある場合には、事前に該当する銀行・機関等への確認をお奨めします。

【ご注意】
※印鑑は押し方や、お使いの朱肉の種類により、かすれ等が発生する場合がございます。
※ご注文が集中した場合、受注を終了させて頂く場合があります。
※受注生産のため当月中にご注文頂きましたお客様は翌々月末日までの配送となります。


丸印18mm［全20種］／各3,600円（税別）


印鑑ケース［全3種］／各2,500円（税別）


捺印マット［全3種］／各2,000円（税別）

キャラ印.comオリジナルグッズ キャラ印.com：https://www.charain.com/




スタンプ［全10種］／各800円（税別）


アクリルフィギュアボックス［全3種］各3,500円（税別）


アクリル壁掛時計［全1種］5,000円（税別）


アクリル置時計［全1種］3,500円（税別）

デフォルメキャラクターを使用したかわいいスタンプ、メインビジュアルの世界観を表現したアクリルフィギュアボックス、アクリル製の壁掛時計と置時計の4商品を発売。

■『閃の軌跡Ⅳ／軌跡シリーズ』キャラ印.comオリジナルグッズ販売ページ
https://www.charain.com/user_data/sennokiseki

※受注生産のため当月中にご注文頂きましたお客様は翌々月末日までの配送となります。

『閃の軌跡Ⅳ／軌跡シリーズ』 Kiritorieオリジナルグッズ キリトリエ：https://kiritorie.com/

『軌跡シリーズ』の切り絵が登場! 『閃の軌跡Ⅳ』のメインビジュアル「Ⅶ組、反攻」を使用したA4サイズ、『閃の軌跡』よりアリサ・ラインフォルトのイラストを切り絵にした2Lサイズの2商品が発売。

■『閃の軌跡Ⅳ／軌跡シリーズ』Kiritorieオリジナルグッズ販売ページ
https://kiritorie.com/user_data/sennokiseki

※受注生産のため当月中にご注文頂きましたお客様は翌々月末日までの配送となります。


キリトリエ2Lサイズ［全1種］6,800円（税別）


キリトリエA4サイズ［全1種］10,000円（税別）

 ©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.

THE LEGEND OF HEROES

暁の軌跡

アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。３月は『閃の軌跡』シリーズの主人公とヒロインであるリィンとアリサが『閃の軌跡Ⅱ』仕様の衣装替えキャラクターとなって登場！　ランディのオシャレな衣装にも注目！

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/

公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj

3月の新／衣装替えキャラクターをチェック！



旅服・アリサ

アリサも『閃の軌跡Ⅱ』より、旅服バージョンが登場。動きやすいタイトめな衣装ながらも、アリサの女の子らしい可愛さも充分伝わる衣装となっている。

旅服・リィン

リィンが『閃の軌跡Ⅱ』で着ていた旅服バージョンで登場。トールズ士官学院の学生服を着ている時よりもさらに凛々しさが増していて、頼りになりそうだ。

4月の新規衣装替えキャラクターは？

※画像は開発中のものです。　※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。



カジュアル・ランディ

ハットにチェックのシャツ。そして伊達メガネとカジュアルな装いのランディ。ミュージシャンのようなオシャレな雰囲気を纏っている。はだけた胸元もセクシー。

© Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.　© USERJOY JAPAN Co., Ltd. All Rights Reserved.　© USERJOY Technology Co., Ltd. All Rights Reserved.

2019年は『軌跡』シリーズ15周年！

英雄伝説 零の軌跡 ～午後の紅茶にお砂糖を～

歴代『軌跡』原作ファルコムBOOKS試し読み！



©YUKIYA MURASAKI,KUBOCHA

『軌跡』シリーズが 2019年6月に15周年を迎えることを祝して、『軌跡』シリーズを原作としたファルコムBOOKSのお試し読みができる特別企画。第3回は、『零の軌跡』シリーズより、特務支援課4人の原作ゲームとはまた違う、ゆる～いifな日常を描いたむらさきゆきや先生の『英雄伝説 零の軌跡 午後の紅茶にお砂糖を』をお届け！

製品情報

好評発売中

著　　：むらさきゆきや
イラスト：窪茶
定　価：1,100円（税別）

第1話 『ティオとみっしぃの日』

やわらかな陽射しの降り注ぐ昼下がり。
早朝から任務に出ていたロイドは、ようやく特務支援課へと帰ってきた。昼食は取り損ねたけれど、ティータイムには間に合いそうだ。
リビングとしても使っている会議スペースに顔を出す。
「やあ、ただいま」
ロイドの声に、テーブルを囲んでお茶をしていた三人ともが、顔をあげる。
赤毛の青年――ランディが、ビッと片手を振った。
「よおっ、遅かったな！　どっかのお嬢さんと、お楽しみだったか？」
「お嬢さんではないけど、荷物を届けた先でね……」
「ほう⁉」
「お婆さんの話が終わらなかったんだ」
「それは、お楽しみじゃねえよ！」
「ロイドは真面目なのよ、ランディと違ってね」
ため息まじりに肩をすくめたのは、パールグレイの長髪が美しい少女――エリィだった。
その隣に座っていた少女が、席を立つ。
「ごちそうさまです」
ライトブルーの髪に白い肌――ティオは、まるで子どものように見える。実際十四歳で

しかなく、本来ならば特務支援課の危険な任務に参加するような年齢ではない。
しかし、彼女は魔導杖（オーバルスタッフ）を使いこなす実力者だ。
ティオは半分ほどミルクの残ったマグカップを持つと、ロイドの横を通り過ぎていく。
「…………ジト」
「え？」
すれ違いざま、睨まれたようにロイドは感じた。
自室へ戻ろうとするティオに、エリィが声をかける。
「ティオちゃん、明日は何時に出る？」
「……午後は混雑すると思います。朝食のあと、すぐに出発しましょう」
「そうね！　そうしましょ」
「はい」
いつも無表情でクールなティオだが、仲間に見せるやわらかい微笑みを残して、会議スペースから立ち去った。
ロイドは入れ替わるように座る。
エリィが紅茶と――昼食抜きを察したのか、パンケーキを切ってくれた。
「ありがとう」

「これ、私とティオちゃんで焼いたのよ」
「そうなんだ、美味しそうだね。そういえば、エリィたち、明日どこか行くのか？」
「ええ、私たち非番だから、ティオちゃんとお洋服を買いに行こうと思って」
「なるほどね……じゃあ、べつに機嫌が悪いってことはないのか……俺の気のせいだったのかな？」
「どうかしたの？」
「うーん……さっき、ティオに睨まれたような……？」
　ほほう、と身を乗り出したのは、ランディだった。
　ニヤリと笑う。
「そういや、最近、ティオすけがロイドにだけそっけないよな～」
「うっ……やっぱり？」
　他の人までそう感じるということは、自分の気のせいではないのだろう。
　エリィがテーブルを叩く。
「もしかして、ティオすけに何かしちまったのか？　あんなこととか、こんなこととか⁉」
「冗談でしょ⁉　まだティオちゃんは、子どもなのよ⁉　あ、子どもじゃなければいいってわけじゃないけど……とにかく、ダメよ！　そんなの」
　子どもなんだから――とエリィは強調する。



　ロイドは首をかしげた。
「俺はティオのこと、子どもだとは思ってないけど……？」
「えっ⁉　まさか、ロイド……本当に……⁉」
　エリィが唇を震えさせる。
　ランディまで驚いて目を見開いた。
　そんな反応をされるとは意外だ。
「おいおい、マジかよ……⁉」
「ふたりとも、どうしたんだ？　ティオは一人前の支援課メンバーだろ？　大人と同じように接するべきだと思うけどなあ」
　エリィがパタパタと手を振る。
「あ、そうよね！　そうね！　ティオちゃんは立派な支援課のメンバーだものね！」
　ランディがうなだれていた。
「まぁ、ロイドだもんな～。どうせそんなことだろうと思ったぜ」
「な、なんだよ……俺、変なこと言ってないだろ？　それより、ティオのことだよ」
「そうだな。まぁ、そんなに難しいことじゃない」
「わかるのか、ランディ⁉」
「ロイド、よく聞け――何もしてないのに女が冷たいときの理由は三つしかない！　気づかず傷つけることを言ってしまったか、何かして欲しがってるのに何もしないからか、約束を忘れてるからか、浮気が見つかったかだ！」
「三つしかないと言いながら四番目があるうえ、それは俺とぜんぜん関係ないと思うけど……」
「数字なんて細かいことさ」
　おおざっぱな性格のランディだった。
　エリィが思案顔をする。
「ん～……ロイドってとんでもなく鈍いところがあるけれど、傷つけるようなことは言わないと思うわ」
「じゃあ、決まりだな！　何かして欲しがってるのに何もしないからだ！」
「何かって？」
　ロイドの問いに、ランディが口ごもる。
「つまり、ナニカというのは……ええっとだな……はぁ、どっちもお子様みたいなものだし、その線はないよな」
「その線？」
「もう、ランディはバカなことばかり言って……あとは、約束を忘れてるとか？　ロイドに限って、そんなことないわよね？」

「約束か……忘れたりはしてないけど、まだ果たせてない約束ならあるかな」
「そうなの？」
「ああ、前にティオと、『ふたりでミシュラムのテーマパークに行く』って約束したんだ」
「は⁉」
「でも支援要請は尽きないし、非番が重なっても、なかなか休めなくて……」
「待て待て！　非番の日でも仕事してるな～とは思ってたけど、そんな約束を放ったらかしてたのかよ⁉」
「ふたりで行くって、どういうこと⁉　ティオちゃんとふたりっきり⁉　ティオちゃんとロイドだけでテーマパークに行くの⁉」
　いきなり詰め寄られて、ロイドはひっくり返りそうになる。
「あ、ああ……」
　すべて肯定だった。
　突き飛ばされた。
　派手な音をたてて床に転がる。
「イテテ……何するんだよ？」
「それは、こっちのセリフだ、馬鹿野郎！　いいかよく聞け！
女の子との約束は緊急支援要請にも勝る‼」

　ずどーん、とランディが断言した。
「なんだって⁉」
　ロイドの背後で雷が鳴った――気がした。
　エリィがため息をつく。
「それは言い過ぎにしても、さして緊急でもない仕事より後回しにされてたら、約束を守る気がないか、忘れてると思っちゃうわね……ティオちゃんがかわいそうになってきたわ」
「いや、俺は忘れてたわけじゃなく、プライベートなことよりも仕事を優先しないといけないと思ってさ。だって俺たち特務支援課っていうのは、この街（クロスベル）の平和を守るためのものだから……」
「女の子の幸せより優先すべき平和なんてない‼」
　ふたつ目の雷鳴だった。
「非番を代わってあげるから、今からティオちゃんを誘ってきたらどう？」
「そんな、エリィ。悪いよ」
「私よりティオちゃんに悪いでしょ。ずっと待たせてたなんて」
「うっ……わ、わかりました」

「今すぐ！」
「は、はい！」
そのようなわけで、ロイドはティオを連れて、ミシュラムワンダーランドに行くこととなった。

翌日――
水上バスの扉が開くと同時に、ティオが桟橋へと降り立つ。すたすたと正門へ向かった。クールを装っているが、脇目もふらず、歩みも明らかに早い。
「ロイドさん、ミシュラムです」
「あ、ああ……」
それは当然なのだけれども、瞳を輝かせているティオを見たら、ロイドは何も言えなくなった。
つまり、自分の考えている『ミシュラム』と、ティオの言っている『ミシュラム』は重みが違うのだろう。
ロイドは出発前にランディに言われたことを思い出す。

「いいか？　女の子を連れて行くってのはな、ただ行けばいいってもんじゃない」
「えっ、そうなのか？」
「その場所で楽しい思い出を作ってこそ、だろうが」
「楽しい思い出……」
「ああ、一生モノの楽しい思い出だ」
「一生モノの!?　なるほど、ティオと約束したときは、そんな簡単なことでいいのかと思ったけど……俺が甘かったようだ」
「百戦錬磨の俺が、ばっちり教えてやるよ」
「ありがとう、ランディ」
そうして、空が白むまで〝一生モノの楽しい思い出〟の作り方を教わった。

「よし、今日は気を引き締めていかないとな」
「どうかしましたか、ロイドさん？」
「あ、ええっと……まずは入園チケットを買わないとね」
「それなら大丈夫です。この日のために、ＭＷＬ（ミシュラムワンダーランド）ワンダーフリーパスを買っておきました。すべての施設で自由に遊べて、ランチとドリンクまでついてきます」

「え？　それだと、俺が連れてきてもらったみたいになっちゃうけど……」
「……はっ⁉」
「もしかして、ずっと楽しみにしててくれた？」
「そ、それは……当然です」
「……ごめんな、待たせちゃって」
「いえ、わたしの一方的なお願いでしたから。あと、勘違いしないでください……わたしが楽しみにしていたのは、みっしぃに会えることですので」
「うん？　それはわかってるよ。ティオは大のみっしぃ好きだもんな」
「……ぜんぜん、わかってません」
「え？」
　すたすた、とティオが足早に進んでしまう。
　もしかして機嫌を損ねてしまったのだろうか？　ロイドは小首をかしげる。
　――なるほど、こいつは難度の高いミッションだ。
　小さく拳を握りしめると、ティオの後を追いかける。非番ということで装備（トンファー）は置いてきた。武器が役立つ状況とは思えないが、それだけに心許なかった。

　ロイドたちはゲートをくぐり、ワンダーランドの奥へと進んでいく。
　ふたりの後ろに、距離を置いて物陰に隠れつつ尾行する者の姿があった。
　ランディである。
　彼と一緒にエリィもいる。
　それに、支援課で面倒を見ている身よりのない女の子――キーアもいた。
　ランディは懐からオーブメントを取り出した。多様な機能を持った第５世代戦術オーブメント、通称《ＥＮＩＧＭＡ（エニグマ）》は、通信機能も備えている。
「こちら、ランディ……目標はミシュラムに入ったようだぜ」
『対象の様子はどうだ？』
　スピーカーから流れてくるのは、彼らの上司であるセルゲイ課長の声だ。
「今のところ、手もつないでねぇな。現在、正門から鏡の城方面に向かって移動中」
『この支援要請の重要度は〝緊急〟だ。最優先で当たってくれ』
「了解！」

鋭い返事をし、ランディはエニグマを懐に戻した。
　エリィが目を丸くする。
「これ緊急なの⁉　ていうか、支援要請なの⁉」
「そうだ」
「本部に報告されちゃうの⁉」
「……依頼者は、ロバーツ主任らしいぞ」
「頭痛がひどくなりそう……」
　ロバーツ主任とは、ティオの出向元であるエプスタイン財団の研究者で、彼女の上司にあたる人物だ。
　あっ、とキーアが指さす。
「ロイドたち、アイス食べてる！　いいな〜、キーアも食べたい！」
「着いて早々に食べ物かよ……どういう段取りしてんだ、あいつらは？」
「ねえねえ、キーアもアイス食べたい」
「ついて来るならワガママ言わないって約束じゃなかったか？」
「ううぅ〜……」
　涙目になりながらも、キーアは下唇を噛んでがまんした。
　ランディが肩をすくめる。

「しゃーねえな、後で買ってやるから。な？」
「ホント⁉　ランディ、やさしい〜」
「あら、ごちそうさま」
「お嬢もかよ⁉」

　ロイドたちは、みっしぃアイスを食べていた。
　みっしぃをイメージしたグレーとホワイトのツートンアイスに、みっしぃの絵がプリントされたクッキーが乗っている。
「おいしいかい、ティオ？」
「はい……何より食べることができてよかったです。このみっしぃアイスは期間限定のうえ、１日３４４個限定で昼にはなくなっていると評判でした」
「なるほどね」
　だから、まず最初に来たというわけだ。
　ランディには、休憩するのは三つくらいアトラクションを回ったあとがいいと言われたけれど、ここは臨機応変に対処して正解だったろう。

味は普通のアイスだったように思うけれど、ティオが喜んでくれたならよかった。
「さて、どこへ行こうか」
ロイドは周りに視線を巡らせる。
ミシュラムのテーマパークは、楽しげな施設がいっぱいあった。先が長い。
そのなかでも目を引くのは鏡の城だろうか。
たたっ、と急にティオが駆けだした。
「え？　ティオ⁉」
「ロイドさん、みっしぃです！」
見れば彼女が駆けていく先には、みっしぃがいた。
こうして、着ぐるみに瞳を輝かせる姿は、歳相応の子どもにしか見えない。
こんなに喜んでくれるなんて、連れてきてよかったな、とロイドは思った。
「なにしてるんですか、ロイドさん！」
「え？」
見れば、カメラを持ったスタッフが待っている。
ティオのほうも、みっしぃの横に立って、髪を手櫛で直したりして、準備万端だ。
「記念撮影です」
「ああ、そうか。え、俺も写るの？」

「当然です……ロイドさんと来た記念なんですから」
「なるほど」
「ロイドさんは、そこ。動かないでください。みっしぃが隣で、わたしがその隣です」
「はい」
「みししっ★」
テキパキとしたティオの指示に、ロイドもみっしぃも軍隊の兵士みたいにビシッと従う。
みっしぃを中心に、左右に並んだ。
バックは鏡の城。
太陽は右上に輝いている。
なるほど、こだわりを感じさせるポジショニングだ。
スタッフが声をかけ、パシャリとカメラのシャッターを押した。帰りに正門の近くで受け取れるらしい。
「この写真、大切にします」
ティオが表情をほころばせ、熱っぽく語る。その相手は、みっしぃだったが。
「みししっ、楽しんでいってね～」
「はい」
みっしぃが、ぽむぽむとティオの頭をなでる。

いつものクールな表情のまま、頬を紅潮させているのが、なんだか微笑ましかった。

背後から甲高い声があがる。

「おっ、みっしぃだ！」

「わーい、みっしぃだ～‼」

小さな子どもたちが駆け寄ってきた。

ティオは名残惜しそうにしつつ、みっしぃから離れる。

みっしぃはMWLの大人気マスコットで、もう記念撮影も終わったのだから独占するわけにはいかない。

それでも、すこし離れたところから、その姿を見つめ続ける。

走ってきた男の子ふたりが、みっしぃに体当たりした。抱きついたのかもしれないが。

「うおー、おれ知ってんぞー、みっしぃって、中に人いるんだろー⁉」

「見せて見せてー‼」

「みししっ、そんなことないよ～？」

「でも、父ちゃん言ってたもん！」

「言ってたー‼」

「みしし……」

スタッフまで弱り顔だが――教育方針は、ご家庭により様々だから仕方ない。やや無粋だとは思うけれど、とロイドは肩をすくめた。

「みっしぃも大変なんだな、ティオ」

感情の消えた顔をした彼女が、つかつかと歩いていく。

「……」

「えっ、ティオ？」

「あなたたちは、間違っています」

いきなり子どもたちに説教をしだした。その威圧感に子どもたちがたじろぐ。

「だって……父ちゃんが……」

「それは嘘です。みっしぃの中に人など入っていません」

「じゃあ、どうしてしゃべってるんだよー⁉」

「みっしぃは、しゃべるものです。当然でしょう。なんの不思議もありません」

ティオが本気で舌戦をはじめてしまった。

説得できればよかったけれど、そうそう都合よくいくはずもない。

「んじゃあ、みっしぃの頭を取ってみようぜ！　そしたら、わかるだろー⁉」

「……ッ‼」

無表情だったティオに怒気が宿った。

すっ、とリュックのなかに手を入れる。

ロイドがトンファーを置いてきているように、ティオもまた今日は魔導杖を持ってないわけだが。
その手には、戦術オーブメントが握られていた。
「エニグマ、駆動……」
ティオが魔法（アーツ）の準備に入る。
「待った！　待った！　ティオ、もう行こう！　そうだ、鏡の城に行ってみようか！」
慌てたロイドは、彼女の手をつかみ、引っ張って連れ出した。
「君たちも、みっしぃを困らせちゃダメだぞ!?　じゃあね！」
ティオの迫力に涙ぐんでる男の子たちと、ゆるゆると手を振るみっしぃと苦笑するスタッフを残してロイドたちは鏡の城へと向かった。

離れたところから、その様子を眺めていたのは、三人——ランディ、エリィ、キーア。
「ねえねえ、ランディ」
「なんだ、キー坊？　まだアイスは無理だからな」
「みっしぃの中に人なんて入ってないよね？」

「え!?　あ〜いや、それは……まぁ……いないような、そうでもないような……」
「だって、みっしぃはみっしぃでしょ？」
「ああ、そうだな……そうだといいな」
ランディが、キーアの純真な瞳に苦悩していると、ハッとエリィが息を呑んだ。
「大変！」
「どうした、お嬢!?」
「ロイドとティオちゃんが……!!」
慌ててランディは、草むらに身を隠しつつふたりへと視線を送る。
まだ不服そうなティオを引きずるようにして、ロイドが鏡の城を指さしていた。
エリィが声を絞り出す。
「手……つないでる」
「……ああ、そうだな」
「つないでる……」
「まぁ、テーマパークだしな」
手くらいつないで当然だろう——お嬢も、たいがい初心（ウブ）だな、とランディは息を吐いた。
キーアが、そっとエリィの手をにぎる。
「エリィも手つなぎたいの？　じゃあ、キーアがつないであげるね」

「ん……ありがとう」
　エリィの表情がやわらぐ。
　えへへとキーアが笑い返した。

　鏡の城に着くと、鐘の音が聞こえてきた。
　見上げる。
「この鏡の城の一番上には、鐘があって……ふたりで鳴らすと、願いが叶うそうですね」
「そうらしいね」
　入園時にもらったパンフレットに、そう書いてある。
　ロイドは城を見上げた。
「ティオは鐘を鳴らすとしたら、どんなお願いをするんだ？」
「……そうですね」
　じっ、と見つめてくる。
　なんだろう？　とロイドは言葉を待った。
　見つめ合う。

　ティオが、かすかに頬を染める。
「……ロイドさんと……もっと……」
「ん？　俺と……なに？」
「……………いえ、なんでもないです」
「？」
「ロイドさんと……なかなか見つからないという、みーしぇを探したいです」
「ああ、みーしぇか」
　みっしぃの妹のピンク色のマスコットだ。ワンダーランドのなかでも、とくに珍しいという噂だが、今日はいるのだろうか？
「探してみましょう……まずは、こちらから」
「わかった」
　そんなわけで、唐突に、みーしぇを探して園内を駆け回ることになった。
　捜査の基本は足だ！
　マップに×印を記入しながらエリアを絞り込んでいく。
　相手が動くといっても走って移動しているわけではないだろうから、こちらが素早く捜査ポイントを絞っていけば発見できる可能性は高い——はずだった。
　広い。

ふたりで行動しているといっても、別行動というわけにはいかないから、必然的にひとりで捜査しているようなものだ。

ロイドは見晴らしのいい場所まで出て、息をつく。

「はぁ、はぁ……きつくなったら言うんだぞ、ティオ？」

「へいきです」

今日のティオは、いつになく元気だった。ロイドのほうが先にめげてしまいそう。

「はぁ、はぁ……ロイドのやつ……どういうプラン……してんだ⁉」

急に走りだしたものだから、尾行に気づかれたのかと思ったが、そうではなかったらしい。

いったい何が目的なのかわからないが、走り回るロイドたちを追いかけて、ランディたちも走らされていた。

エリィも肩で息をしている。キーアが青ざめた顔をしていた。

「あぅ……もう……だめ……キーアもう走れないよ……」

「無理するな、キー坊」

「でもひとりでは残していけないわ」

「ああ、そうだな。お嬢も残って休んでろ。俺はひとりで尾行する」

「そんな……」

「気になるのはわかるけどよ、キー坊をひとりにはできないだろ？」

「もちろん、そうね。じゃあ、落ち着いたら連絡して」

「りょーかい」

ふたりを残して、ロイドたちのほうへと足を向ける。

背後からエリィが声をかけてくる。

「ランディ、気をつけて……」

「フッ……大丈夫さ。ティオすけのセンサーは優れちゃいるが、テーマパークの騒がしさのなかじゃ、役に立たないハズだ」

「それじゃあ、私たちは休憩所へ行くわね」

「ああ、俺の代わりにアイスを買ってやってくれ」

「わーい、アイスー‼」

急に元気になったキーアに苦笑しつつ、ランディは走りだした。

しばらくして――

まるで犯人捜査のような熱意で走り回っていたロイドたちだが、さすがに疲労が溜まったのか、話しこんだ後、休憩所へと向かいはじめた。
ロイドが「もうすこしワンダーランドを楽しもう」と持ちかけ、「遊びながら探しましょうか」とティオが応じたわけだが。離れて尾行していたランディが知るよしもなかった。
休憩所に向かうロイドたちを見て、慌ててエニグマを取り出す。
「……やばい……出ないぞ」
そういえば、尾行任務ということでエニグマは音がしないように設定してあった。
鉢合わせなんてことになったら、大変だ！
ランディはエニグマでの呼び出しを繰り返した。



その頃、エリィは休憩所の店外にあるパラソルテーブルでくつろいでいた。
走り回っているランディには悪いと思ったが、休憩するからには最大限に休むのも任務のうちだ。
キーアにアイスを買ってあげ、自分はクッキーとアイスレモンティーを頂いた。
みっしぃのプリントされたクッキー。こんな日でなければ、ティオのためにお土産にし

たかもしれない。
「あ」
キーアが指さす。
「なに？」
「ロイドとティオだ」
「え⁉」
慌てて視線を向ければ、たしかに疲れた足取りで歩いて来るロイドたちの姿があった。
エリィは席を立つ。
「隠れるわよ、キーアちゃん！」
「なになに、こんどは隠れんぼー？」
「そんなところ！」
デートを尾行していたなんて知られたら、嫌われてしまうかもしれない……すくなくとも、ティオは喜ばないだろう。
店の外を走って逃げるだけの時間はないと判断し、エリィは目の前の店に入った。
建物の柱の陰に身を寄せる。
ほどなくして、ロイドたちが店に入ってきた。
ティオがメニューを指でなぞる。

「おすすめは、みっしぃカレーだそうです。甘口ですが、濃厚だとか」
「いいね。飲み物はどうする？」
「そうですね……私は、みっしぃソーダにします」
「じゃあ、俺は、みーしぇレモネードにしよう」
それぞれ、水色のソーダと、ピンク色のレモネードが出てきた。カレーも受け取って、外のパラソルテーブルに落ち着く。
エリィはふたりの様子を窺いつつ、バッグからエニグマを取り出した。着信が5件もある。
――しまった！
周りが騒がしかったから気づけなかったらしい。
すぐに連絡を返す。
「……ランディ？」
『よ～やく繋がったか！　お嬢、ロイドたちが――』
「あやうく見つかるところだったわ」
『ははは、まぁ、バレてないなら、セーフだな。目標の様子は？』
「様子……」
視線をロイドたちのほうへ移す。
ちょうど、レモネードを傾けたところだった。
「お、これ美味しいな」
「そうですか。実は、みーしぇレモネードと迷っていたのですが……」
「ちょっと飲んでみる？」
「!?　……………いいのですか？」
「え？　そりゃ、味見くらいなら」
「量の問題ではないと思いますが……わかりました。では、い、いた、いただき、ます」
機械仕掛けみたいな固い動きでティオがレモネードのグラスを持つ。すこし迷ってから、グラスの端に唇をつけた。さすがに、ロイドの使ったストローを咥えるのは恥ずかしかったらしい。
なんとも初々しかった。
ぽつり、とエリィは漏らす。
「いいなぁ……」
『お嬢？　それが〝目標の様子〟の報告かよ？』
エニグマで通信中なのを失念していた！
「ハッ！　いえ、その……レモネードが美味しそうだったのよ」
『まぁ、そういうことにしておくか。俺も喉が渇いたな。ちょいと休ませてもらうか。店

での行動は、お嬢がフォローしてくれ』
「了解」
　エニグマをバッグに戻して、ふと気づく。
　キーアがいない⁉
　慌てて店内に視線を巡らせる。
　カウンターでジュースを受け取っているのを見つけた。
　駆け寄る。
「キーアちゃん、なにしてるの⁉」
「ロイドと同じのが飲みたくなっちゃって」
「はぁ……もう勝手なことしちゃダメよ。びっくりしたじゃないの」
「はーい」
　店員さんが安堵の笑みを浮かべる。
「ああ、よかった。お母さんですか？　みーしぇレモネード、30ミラになります」
「……ッ⁉　あの……まだ……18です」
「え？　みーしぇレモネードは、30ミラなんですが……？」
「私……この子の、姉、のようなもの……です。まだ18歳ですから」
「あっ、申し訳ありません！　大人びてらっしゃるもので！」

「いえ……」
　ぺこぺこ謝る店員に、エリィは静かに30ミラを差し出すと、ゆらゆらとカウンターを離れた。
　キーアが後をついてくる。
「ごめんね、エリィ。そんなに悪いことだと思わなくて……ジュース飲む？　ロイドが美味しいって言ってたよ？」
「……大丈夫よ、キーアちゃんはなにも悪くないわ」
　大人びて見られることには慣れているが、子どもがいると思われたのは、ちょっとショックなエリィだった。
「ぐす……まだ18歳なのに……」
　そこへ、ランディがやってくる。
「よお、調子はどうだ？」
「ちょっ⁉　ちょっと、見つかったらどうするつもり⁉」
「この店、裏側にも出入口があるんだよ。どうした？　浮かない顔して？」
　さすが女の表情には鋭い。
　でも相談するようなことではない、と思う。
「なんでもないわ」

「そうなのか？」
「ハァ～……こうして、テーマパークでキーアちゃんを連れてると、親子三人に見えたりするのかしらね？」
「なっ!?　な、なに言ってんだ、お嬢!?」
　ランディが珍しく焦っていた。
「どうかしたの？」
「いや、お嬢もたいがい……やれやれ、なんでもねえよ」
　キーアは、みーしぇレモネードを飲んで御満悦だった。
「おいしー!!」

　ロイドたちはランチのあと、いくつかのアトラクションを見て回り——
　陽が西に傾いてきた。
「もうすぐ日が暮れるな……」
「はい」
「夜には花火とかあがるらしいよ」

「え……あの……夜ですか」
「向こうに見える立派な建物は、ホテルかな？　そういえば、ミシュラムのホテルって、どこもすごく豪華だからな」
「ホテル……!?」
　ティオの顔が赤くなっていく。
　ぱたぱたと手で首筋を扇いだりして。
　そんな彼女の様子など、ロイドは気づくはずもなく。
「ねえ、ティオ」
「……っ!?」
「明日も仕事だから、暗くなる前に帰ったほうがいいと思うんだけど……ん？　どうかした？　疲れてるのか？」
「い、いえ……そうですね。わたしとしたことが……わかりました。では、次で最後にしましょう」
「どれがいい？」
「まだまだ、いっぱいありますが……えっと、あれに」
　ティオが選んだのは、観覧車だった。
　八角形のゴンドラが巨大な円を描いて廻っている。

「いいね」
「はい」
ロイドはティオと、ゴンドラに乗った。ごうんごうんと昇っていく。
ワンダーランドどころか、ミシュラムぜんぶが見渡せた。
穏やかな午後の陽差しに包まれた楽園。
ほぅ、とティオが吐息をこぼす。
「……素敵です」
「思い出に、なったかな？」
「え？」
「一生の思い出になるくらい……楽しめたかな？　俺は、ティオとの約束を果たせたんだろうか……？」
「ふふ……もちろんです。ありがとうございました、ロイドさん」
「よかった」
ロイドは椅子に背を預ける。
体から力が抜けていくような安堵を感じた。
観覧車から降り、ロイドたちは正門に向かって歩きはじめる。

途中、ふと売店に寄った。
「ロイドさん、なにか欲しいものがあるんですか？」
「いや……高価なものは買えないけど……これなんか、どうかと思って」
ロイドは《ラバーストラップみっしぃ》を手に取り、差し出した。
ぶんぶんとティオが手を左右に振る。
「そんな、悪いです。連れてきてもらったうえに」
「いや、今日はチケットまで用意してもっちゃったからね。ティオさえ気に入ったなら、贈らせてくれないか？」
「もちろん、かわいいと思いますけど……」
ティオが目を輝かせる。
「じゃあ、これを……」
「ロイドさん……」
そのとき、楽しいテーマパークに不釣り合いな甲高い悲鳴が聞こえてきた。
「なんだ⁉」
「なにごとでしょうか⁉」
商品はいったん置いて、ロイドは悲鳴のしたほうへと走りだす。すぐ後をティオも追いかけてきた。

逃げて来る客たちの間を縫って、ロイドたちは広場へと出た。

そこには、ペンギンに似た青色の魔獣が！

「ペングーだ！」

広場に青色のペングーが二匹いる。

まさかテーマパークに魔獣が出るとは思わなかった。

「ロイドさん、あれを！」

ティオが指さした先には、逃げ遅れている子どもの姿が。男の子がふたり、怖すぎて腰が抜けてしまっているらしい。

「あわ……わわ……わ……」

「うわーん‼」

そのふたりをかばうようにして、みっしぃが立ちふさがっている。

テーマパークのマスコットなのに⁉

ロイドは素手のままだが、ためらっている暇はなかった。市民の安全を守ってこその警察官——特務支援課だ！

全力で駆け寄り、ペングーの前へと飛びだす。

「クロスベル警察です！　ここは俺たちに任せてください！」

「みなさん、早く逃げてください」

ともに駆けつけたティオが、市民を安全なところへと誘導する。

子どもたちの手を引きながら、みっしぃが頭をさげた。

「みししっ、ありがと～」

こんな状況にもかかわらず役柄を崩さないとは……ロイドは妙なところで感心してしまった。

ティオは感動に震える。

「じーん……特務支援課に出向して以来、こんなにうれしかったことはありません」

「えぇっ、そこまで⁉」

「負けられませんよ、ロイドさん」

「あぁ、もちろんだ！」

ティオが魔法に意識を集中させる。足元に魔方陣が浮かびあがった。

「……エニグマ、駆動」

「速攻でケリをつける！」

今にも飛びかかってこようとするペングーの機先を制して、ロイドは間合いを詰めると

拳を叩きつけた。
ぎょわ！　ぎょわ！　とペングーが声をあげて、のけぞる。
「……ぐッ‼」
ロイドの拳に痛みが走った。
もう一体のペングーが嘴でつついてきた。
キシャー‼
おじぎするような動作は愛嬌があるものの、ハンマーのように重たくて固い嘴を体ごとぶつけてくる攻撃だ。その威力は半端ではなかった。
「ぐあっ⁉」
「ロイドさん⁉　この……ダイアモンドダスト‼」
足元に冷気が広がる。
ペングーの周囲に白い結晶が集まった。
氷の槍が現れる。
魔法で作られた無数の氷槍が、魔獣へと向かって飛ぶ。
命中するたびに冷気を撒き散らして氷が砕け散り、美しい輝きを放った。
水系の強力な攻撃魔法だ。
ぎょわ～～～ッ⁉　と青色のペングーたちが悲鳴をあげる。

がっくりと動かなくなった。
どうやら魔獣たちは戦意を喪失したようだ。
ティオが息をつく。
「ふぅ……敵集団、撃破しました」
「やったか……」
ところが、またも甲高い悲鳴が聞こえた。
広場にある建物の陰から、赤色のペングーが現れたからだ。しかも、八匹も！
ロイドの背筋が凍りついた。
——あんなにも数が多いなんて‼　ふたりだけでは、防ぎきれない。
魔獣たちが、グアグアと叫びながら、逃げる客を追いかける。
「やめろー‼」
ロイドは駆けつけて、赤色ペングーの横面に一撃を食らわせた。相手の注意を引きつける。
しかし、多すぎる。
六匹ほどが散り散りになって客たちを追いかけ回す。
ティオの魔法も、これほど散り散りになられては、効果範囲に捉えきれない。
——このままでは、みんなを守れない！

「くっ……どうすれば⁉」
そのとき、物陰から長身の男が走り出てきた。
聞き慣れた声が響く。
「こっちは俺に任せときな！　おおぉぉぉ……‼　クリムゾンゲイル‼」
巨大な斧槍が、ペングーたちを薙ぎ払った。
続いて、発砲音があがる。別の方向へと走っていたペングーがもんどりうって倒れた。
「ここは通さないわ！」
現れたのは、パールグレイの長髪をなびかせる美しい少女だった。
ロイドは驚いて声をうわずらせてしまう。
「ラ、ランディに、エリィも⁉」
ティオも目をしばたいた。
「……おふたりとも……どうしてここに⁉」
離れたところから、「ロイド、ティオ、がんばれー‼」と声がした。
「キーアまでいるのか⁉」
「おしゃべりは後だ！　こいつが必要だろ、ロイド！」
ランディが放り投げたのは、使い慣れた装備（トンファー）だった。
「持ってきてくれたのか⁉」

「こんなこともあるかもしれん、ってセルゲイ課長がな！」
「すまない、ランディ‼」
ティオが再び魔法の魔方陣を浮かびあがらせる。
「エニグマ、駆動……みなさん、お願いします！」
「まかせて！」
「おっしゃぁッ‼　とっとと終わらせるぜ！」
「よし、一気に行くぞ！」
ランディたちの加勢を得て、ロイドとティオは魔獣を撃退することに成功した。

魔獣が現れた原因は、柵の取りつけ不良だった。
弱っていたところがあって、壊されて入ってこられてしまったらしい。
ミシュラムの保安責任者が何度も頭を下げて感謝してくれた。
それよりも、ティオには、みっしぃのお礼ひと言のほうがうれしかったようだが……
「本当にありがとうございました！　今から、すべてのフェンスを入念に点検しなおし、がっちり補強します‼」

責任者の人が固く約束してくれた。
ロイドはうなずいて返す。
「そうしてください。楽しい場所だからこそ、安全第一ですからね」
ＭＷＬを出た頃には、すっかり西日が差していた。
「いや〜、だいぶ遅くなっちまったな〜」
ランディがぼやく。
キーアが大きなあくびをして、エリィが気遣う。
「自分で歩ける？」
「へーき……むにゃ……んにゅ」
いつも通りの平和な特務支援課の風景だ。
ティオがジト目なこと以外。
「……それで？　どうしてミシュラムにいたのですか？」
「ギクッ」
ランディが目を逸らす。
そういえば、とロイドは小首をひねった。
「たしかに妙だな。ランディもエリィも非番じゃないはずなのに」

「あ、いや……今日のは支援要請だったんだ。そうだよな、お嬢？」
「えっ⁉　私に振られても……」
「エリィ〜、もう隠れんぼしなくていいの〜？」
「ちょっ、キーアちゃん⁉」
ティオの表情が曇っていく。
「……つまり、わたしとロイドさんを、つけてきたのですか？」
「えっ？　そうなのか？」
ぶんぶん、とランディが首を横に振った。
「ち、違うって！　偶然！　お、俺は……そう！　お嬢とデートしてたんだよ！」
「ええっ⁉　じょ、冗談じゃないわよ！　そんなこと絶対にしません！」
「お嬢、ここは話を合わせるとこだろ⁉」
「そんなこと言われても……だ、だめよ、そんなの」
頬を染めてエリィがうつむく。
ティオが口をへの字にした。
「エニグマ、駆動……」
ぶおん、と魔方陣が広がっていく。
「えっ、ティオ⁉」

慌ててロイドは止めに入るけれども、気づくのが遅れた。
耳まで真っ赤にしたティオが、ランディへと手を突き出して——魔法を発動する。
「お仕置きです！　アイスハンマー‼」
「うひゃ～～～～～～～～～～～～～～!?」
夕焼けに染まるミシュラムの桟橋に、騒がしい悲鳴が響きわたるのだった。

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント‼

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！





① 3名様
『閃の軌跡Ⅳ』特製miniトートバック
『閃の軌跡Ⅳ』のキービジュアルをモチーフにした非売品のオリジナルminiトートバッグを3名にプレゼント‼

② 3名様
『英雄伝説 空の軌跡 the 3rd Evolution』クリアファイル
『英雄伝説 空の軌跡 the 3rd Evolution』のパッケージイラストで使用されたキービジュアルのA4判クリアファイルを3名にプレゼント‼

ご応募は特設サイトまで▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/
メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、(falmaga@field-y.co.jp) まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.98プレゼント係

1：お名前（ペンネーム可）
2：面白かった記事の番号→
　つまらなかった記事の番号→
　（記事一覧から１つずつ）
3：アンケート①『軌跡』シリーズで一番好きなSクラフトは？
　アンケート②『軌跡』シリーズで一番好きなアーツは？
4：希望するプレゼント番号
5：ご意見・ご感想など

記事一覧

1：イースⅨ最新情報
2：も～っと集まれ！ファルコム学園
3：英雄伝説 空の軌跡SC
　～絆の在り処～
4：ファルコムニュース
5：暁の軌跡最新情報
6：英雄伝説 零の軌跡 午後の紅茶にお砂糖を

応募締め切り　4月25日（木）

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.98

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/

Copyright	©Nihon Falcom Corporation.All rights reserved. ©2019 FIELD-Y ©DAISUKE ARAKUBO 2019 ©SHINKI KITSUTSUKI 2019

日本ファルコム(株)のライセンス許諾商品です。